

現代日本の考古学、社会、アイデンティティ

溝口 孝司

現代日本の
考古学、社会、アイデンティティ溝口孝司
(九州大学)

1

問題

- 考古学者としての僕たちがどこからきて、今どういうふうここにいて、どこにどのようにゆけばよいのか？
- 考古学をどういう風に〈生きる〉のか？

2

キーワード

- キーワードは、〈アイデンティティ〉： そのようにある自分、そのようになりたい自分、そのような考古学者としてある自分、そのような考古学者になりたい自分

3

アイデンティティと予期

- アイデンティティ： 予期とそれを構成する記憶
- 予期： このようなシチュエーションで自分はどのようにふるまう、このようなシチュエーションで自分はどのように振る舞うと思われる（こんなひとにはこんなふうと思われる）、このようなシチュエーションでこんなひとはこんなふう振る舞う、このようなシチュエーションでこんなひとはこんなふう振る舞うだろうと自分は思うだろうと思われる....

4

予期の構成

- (成功と失敗の)体験の(言說的・非言說的・前意識的)記憶とさまざまな情報の複合が構成
- 体験の記憶＝社会的体験の記憶、社会的体験はコミュニケーションにおいて・コミュニケーションを通じて獲得される。〈自然〉もコミュニケーションに媒介されて体験されるので、〈自然〉の記憶もコミュニケーションに媒介されて構築される。

5

コミュニケーション

- コミュニケーションとはなにか？
- 自律的なシステム、
- それ自身とそれ以外を区別し、参加者の情報分節・発話・理解を喚起しながら、それを通じて継続するなにか。【@@/以外】の区別の継続
- コミュニケーションを個人の心理(これもシステム)のオペレーションに還元することはできない→連続的〈創発〉だから。コミュニケーションはコミュニケーションによって産み出され、コミュニケーションであり続ける。
- その行方をだれも(完全には)コントロールできないし、予期できない。

6

コミュニケーション

- ではなく世界>、起こりえるすべてのコミュニケーションで構成される地平は秩序のないジャングルか？そんなことはあり得ない。なぜなら、コミュニケーションはコミュニケーションに接続され、続かなければならないから。コミュニケーションがコミュニケーションに接続されないと、人間は生きてゆけないから。
- そのために、相互の予期の調整と、コミュニケーションの構造＝要素とその組み合わせのあり得る時空間的位置関係と幅が、同時かつ相互的に決定され、産み出される＝<創発される>。

7

コミュニケーションとアイデンティティ

- コミュニケーションの構造・個人々の予期内容＝アイデンティティ
- これらは創発する＋相互の再生産の前提を供給する。これらはそれぞれさまざまな物質に媒介される。音声、身体、material items (from micro to macro)
- material itemsをめぐって、考古学は過去のコミュニケーションとアイデンティティとふれあい、現在のコミュニケーションとアイデンティティそのものとなる
- 過去のコミュニケーションとアイデンティティの創発を媒介したmaterial itemsに媒介されて現在にいまる我々がコミュニケーションとアイデンティティの創発を体験・継続する

8

目的

- すべてのモノの研究はコミュニケーションとアイデンティティの創発と再生産の媒介として研究され得る。これを掘り下げると社会考古学的物質文化研究へと向かう。(社会考古学的物質文化研究)しかし今日の主題はこれではない。
- <考古学的コミュニケーション>とそれに関与する個人々の<アイデンティティ>が、<日本>という時空間において創発し再生産され続けるありさまを検討し、そこにある傾向性があるかどうかを吟味する。
- それに基づき、どのように、この<世界>で、考古学について、考古学を通してどのようにコミュニケーションし続けられよいかについて考える。(社会考古学的日本考古学言説空間研究)

9

方法

- I. 日本考古学を構成するさまざまなコミュニケーション・システムの分節化と、
- II. その布置／時空間的相互関係のマッピング、
- III. それらの構造の解析、
- IV. それらと相互規定的なアイデンティティの解析、
- V. システム間の重層的関係がアイデンティティ構築におよぼす作用、
- VI. 個々のシステムの独特のオペレーションがもたらす作用

10

方法(脱線)

- 日本と日本考古学の言説空間を構成するコミュニケーション・システムとアイデンティティ：これらはすべて、意図的に構築されたり意図的にコントロールされてきたものでは「あり得ない」
- これらは相互規定・相互前提供給関係により創発し、再生産を通して変容してきた
- そのような<流れ>の結節点としての事件や個人は、出でてくても、それらはあくまで<作用>のエピソードである。そう理解すれば、お互いにお互いに対して寛容であることができるはず。ルサンチマンでものごとくを行う＝【こうあらねばならないのに、そうならない、でも原因がわからない、でも、すくなくとも自分は悪くない、だったら他者を総体として憎もう！】
- そんなことはやめましょう！！！！！！！！

11

分析

- 【@@である／@@でない】：考古学である／ない、旧石器考古学である／ない、縄文考古学である／ない、弥生、古墳、古代...

12

分析

- B: 考古学である／考古学ではない：より規定的
- C: @@考古学である／@@考古学ではない：Bと強い相互関係にあるが自律的、これらそれぞれが経緯した<近代史>に強く規定される
- これらの再生産に関与する個人々(の心理システム)、さらにそれと相互規定(＝創発)関係にあるさまざまなシステムに相互規定される なかでも...
- A: 世界はこうあるべきだ／こうあるべきではない
→日本においてはこのコミュニケーション・システムの参照軸が多様化・断片化した末に<ウヨ>・<サヨ>軸が前置化してきている
→日本人(的)である／日本人(的)ではない、日本の利益にかなう／日本の利益にかなわない、男らしい・女らしい／男らしくない・女らしくない(無添発言を思い出そう)...

13

分析

- 以上すべてに対して微妙なのが、X【<科学>軸】真理／非真理
- 物質／非反省的对象の學動的記述・解析についてはおおむね貫徹可能だが(しかし不確定性の問題を想起せよ)、なにをどのように対象とするのか、については原理的に貫徹できない(だから科学社会学が成立し、必要とされる)。そして、
- Z【空虚としての究極の参照軸＝<天皇>の存在】が、さらに呼び出される場合が多い。これはXABCの再生産それぞれにおいて、そうである。

14

分析B 考古学である:考古学ではない

- 考古学である:考古学でない::考古学そのものである:考古学そのものではない
- ⇨考古学そのものがなんであるかを語るとは考古学そのものではないので語らない

15

分析B 考古学である:考古学ではない

- 考古学である:考古学でない::ものについての無媒介の体験である:ものについての媒介的体験である
- →(派生)e.g. 土器の非多変量解析的分類編年:土器の多変量解析的分類編年 土器の「文様帯系統論」依拠分類編年 土器の非「文様帯系統論」依拠分類編年
- ⇨「無媒介とはなにか、媒介とはなにか」を語るとは媒介的となるので語らない(でも飲み屋(非公式空間)では語ってますよ!)

16

日本における【考古学である:考古学でない】の特徴: 無媒介の作法

- 対象について語るためのさまざまな前提の共有を意識的に無自覚の前提としてノフリをして共有する
- <無媒介の作法>と名付けましょう=これはそれぞれのものが媒介!
- e.g. 殴られて痛みをもらったから、痛みの感じられない議論はだめ→痛みを感じたことのない人が痛みをイメージして語ることを往々にして排除=特定の媒介を<非媒介>と記号化することによって超越化(しているだけじゃないのでしょうか?)

17

<無媒介の作法>の実態

- 特定の媒介の<非媒介>としての記号化→特定媒介の特権化/超越化→歴史・偶発性を否定する態度、多様性に対して本質的に非寛容な態度。
- イマジネーション・偶発性(=自由)・理解と共感・寛容・非暴力/反強制(=自由の前提)→<民主主義>の根幹。上のようなコミュニケーション・システムの構造・アイデンティティは反民主主義的ではないですか!! 日本考古学は非民主主義的言説空間を構築しているかもしれません!? 少し言い過ぎ、かつ脱線したかもです。すみません。

18

分析C 縄文・弥生コミュニケーションシステム

- <前>史:歴史::前大和(天孫)民族::大和(天孫)民族→基盤的
- これは、天皇家の(継続)存在に体现される要素複合の列島出現(=「複合」)の出現である=完成品の出現である=どこかで出来上がって列島にやってきたものである)前と後の区別を基盤的前提とする。

19

分析C 縄文・弥生コミュニケーションシステム

- <自然>史:<政治>史::<(生態)文化>史:<政治>史
- 母性史:父性史::本能史:判断/決断史
- <人類学(受容への寛容性)>:<社会経済史学(受容への寛容性)>

20

分析C 縄文・弥生 VS 古墳考古学コミュニケーション・システム

- <住>日常考古学:墓<モニュメント>考古学::常民「人生」:エリート「系譜」::手工芸品:威信財

21

分析A

- ⇨かわいい縄文、かわいい弥生、かわいい古墳!
- ⇨NipponのShinto, monodukuriのルーツは縄文にあり!
- グローバルかわいい/きもい言説構造軸、東北アジア・グローバル・ウヨサヨ言説構造化軸最強!!
- そして、Zが、「すべて」を許す。だから、みんな「語りあう」ことをやめて聞き直る、逆切れする。Zのおかげで、みんな非寛容になれる。寛容であるかのように感じることを保証されながら...
- 実は、これにどう対処するかが一番緊急の問題なのだ。

22

Xはどれだけ<超越的>でありえるか？

- X(科学言説構造化軸)でA, B, C, Zすべての暴走を止められるか？止められないじゃないか？

23

<ウヨサヨ言説空間> is expanding

- そして今や[ウヨサヨ言説構造化軸]→無媒介の作法から、無媒介の作法の戦略的テクノロジー化へ：歴史は無意味だから意味化するのだ、日本人は日本人だし日本史は日本史だ!?
- そりゃそうだろう。どういう風に意味化するか、に人類はすべてをかけてきたんだよ、少なくともホモ・サピエンス・サピエンスはね!!
- それを<国家>というコミュニティーの機能という意味に排他的に接続しないでくれ。それを<超越化>するのはやめてくれ。

24

アンチ超越的参照軸

- そのときそのときに、コミュニケーションがつくように人類は工夫してきた。このために、現状でなにが重要か、何が可能か？そのことをコミュニケーションし続けるために、超越的参照軸を探求することに超越的価値をおくことは暴力(非寛容)的。
- ここまでいかなる絶対的超越の意味も見いだせなかったのに、今、ここで見いだせる、と前提してコミュニケーションしようとするのは、端的に<暴力的>だ!!!

25

<国家社会>の影

- いずれにせよ<国家社会>の役割の影は、せりあがってくる。調整機能の空洞化がそろそろ限界に達しようとしているから。グローバル化=エコノミー、後は何でもあり、パラダイムの前に、さまざまな調整共同体をめぐる多層的な綱引き/闘争が激化している。すべてのコミュニケーション・システムは、その意味で、フーコーがずっと昔に喝破していたように、闘争の場であることが露わになった。

26

闘争(フーコー的意味で)

- <闘争>は、しかし大きさですね。すべてがすべてにつながっている、というかそれぞれがそれぞれ結節である、という気持ちをとときどき確認して、<考古学を生きてゆく>ということです。でも、それは苦しいものになったら、その瞬間に敗北、といった種類の認識です。だって、苦しくなったら、だれかを責めますから。

27

僕はこう思います

- 闘争の場と闘争そのものをフェアなものにしよう：イマジネーションと偶発性と歴史に正当な場をあたえよう！
- 「ばかな考え」の提出を容認・推奨しよう！
- 「ばかな考え」がどうなるか見ることのできる「余裕」を確保するために共闘しよう！
- そんな、ドライでウエットで優しいコミュニティーをつくるための言説を編むのは、人間を対象とする学問の役割の一つです。

28